

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

子どもの言葉のやりとりから見える、自然への関心

学校法人常磐会学園 常磐会短期大学附属泉丘幼稚園いずみがおか園

子どもたちは遊びの中で、見えないモノに感じた不思議さや疑問をもつことが遊びの魅力となり、繰り返し楽しみながら探求するようになります。

この写真は柵の隙間から来る風に気付き、風車が回るかどうか試す遊びになっています。

今回は、このような気付きや探求を、子どものやりとりに注目して考察している事例です。



● 風を感じて遊ぶ／4歳児

✿ 風との出会い

4月下旬、5歳児組が集会の時にこいのぼりを揚げた。それから毎日こいのぼりを見て、自然と子どもから「今日も気持ち良さそうに泳いでる」という言葉が出る。風がない日もやりとりがある。

Aちゃん：「あれ？今日全然泳いでへんで！元気ないなあ」

保育者：「ほんまや！なんでやるね？」

Bちゃん：「だって、風ないやん！いつもは、お口から風いっぱい食べてるやろ？」

遊びの中でこいのぼりが泳ぐ姿に目を留め、【風】という言葉が子どもたちから出始めた頃に、自分たちのこいのぼりを作った。できたこいのぼりを大事に大事に運ぶ子どもたち。5歳児組が揚げるこいのぼりの横に自分たちのこいのぼりを揚げると、今まで見てきた5歳児組のこいのぼりと同じように泳ぐ様子に大喜びする。風向きによっては、自分たちのこいのぼりの方がたくさん泳ぐ時がある。

Cちゃん：「見てみ！僕たちの方がめっちゃ泳いでるで！」

Dちゃん：「年長さんのこいのぼりも、もっと風食べた方がいいのになあ！」



● 考察

初めは歌の歌詞、絵本などの情報から「泳いでる」という表現が出ていた。【風】になびく様子を「口から風を食べて元気に泳ぐ」という子どもの生活経験の感覚で捉えている。4歳児なりに風を感じた一言ではあるが、イメージの世界のことだったのだろう。

自分たちのこいのぼりを揚げることで、「泳ぐ」「風を食べる」というイメージの世界から、実体験の世界へと繋がりつつある様子が伺える。自分たちのこいのぼりと5歳児のこいのぼりの動きの違いや、風向きなどにより動きが違うことを、子どもの中で「あれ?!」と感じて、言葉にした瞬間だったのだろう。

✿ 風に触れる

存分にこいのぼりに触れて遊んだ後、もっと【風】に触れて遊べるように、紙コップを使用した風車を用意した。ただ環境に置くだけではなく、1つは保育室の入口に吊るした。入口の風車を見た子どもたちが、「めっちゃ回ってるー！これ何！？私も欲しい！」と関心を示した。子どもたちは、紙コップ風車の姿・形から【タコさん】と名付けた。初めは白い紙コップだったが、「色塗りたい！」「目も付けたい！」と、それぞれに工夫したり愛着をもったりする姿が見られる。この時はまだその場で動き回り【タコさん】を回し、「自分が走ると【タコさん】が速く回る」ことに気付く。遊び終わった後は、テラス入口に紐をたらして洗濯ばさみを用意し、自分でぶら下げられる場を設定した。ぶら下げた風車が風で回る様子を見て、やりとりする子どもたちがいる。



Eちゃん：「ちょっと見て！めっちゃ凧さんまわってるで！」

Fちゃん：「走ってないのになあ！」

Gちゃん：「・・・」（考え込む様子）

● 考察

興味をもつきっかけになる環境や片付ける場所が、【風】が影響されるところであったことは、何げない瞬間に回る様子が見てとれ、【風】を感じ、【風】について考える機会になった。

✿ 風を探す

何日か保育室や廊下で遊んでいた子どもたちであったが、前日考え込んでいたGちゃんが外で試したくなり、ホール横のテラスに行く。場所によって変わる“回る様子”を試すように、いろいろな所に行っては立ち止まる動きを繰り返している。

保育者：「どうしたん？」

Gちゃん：「あんな、立ってるだけでも回るところ探してるねん。」

保育者：「そんなところあるの！？」

Gちゃん：「うん！来てみ！このドアのところ！」

保育者：「すごいね！大発見だね！」

Hちゃん：「今日は全然アカンなあ。だって、いつも立ってるだけで回る場所でも回れへんもん」

Iちゃん：「あるで！風！」

Hちゃん：「ないやん！」

Iちゃん：「お空見てみ！じ～って見てたら雲がちょっとずつ動いてるやろ？あと、横の木見てもみ？葉っぱちょっと揺れてるやろ？風が吹いてるからやねんで！」

Hちゃん：「ほんまやー！！」



● 考察

Gちゃんは自分なりに考えた結果を「試した」のだろう。その結果、自分が思っていたような成果が見られた。普段自分から話すことが少ないが、この日は積極的に思いを伝えに来ている。よほど成果に満足したのだろう。体では感じられなかった【風】であるが、子どもの感覚ではいろいろな様子から【風】を感じている。自分たちで遊びを進める、考えるということがいかに重要であることか、改めて感じられた。

✿ まとめ

言葉のやりとりをよく見てみると、子どもの捉え方が移行していつているのがよく分かる。

1. 一番身近にある絵本や慣れ親しんだ歌 [「泳いでいる」「風を食べる」の言葉]
2. 遠くで行われていることから自分の身近で行われること [5歳児のこいのぼりの横で、自分たちのこいのぼりが風で動く]

3. みんなのものだったものが自分だけのものができたこと〔みんなのこいのぼりから、自分の風車〕

こうして、遊びの中で自然に順序立てられていたことが、その起因だったのではないか。

今までは一言に【風】と言っても、目に見える訳でもなく、いつもある当たり前のものと感じていたであろう。「今日は涼しいね」「風がきついね」などといったやりとりはあったものの、“言葉”の中で捉えていただろうが、“自然の存在”として考えたことはなかったのではないか、と思う。今回の様子を見ると、いくつかの遊びを通して子ども自身が気付かない間に【風の存在】が心に浸透していったのだろう、と考える。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」